1/15 ダニエル書 6 章 11-23 節「主に信頼して生きる」

小池 宏明 師

紀元前 539 年、メディアとペルシアの連合国が、ダニエルたち捕虜を利用していたバビロン帝国を滅ぼして、政権が替わった。しかし、既にバビロン帝国時代から王に仕え、国の重要な働きをしていたダニエルの地位は揺るがなかった。時の王ダレイオスは、ダニエルの有能さ、誠実さを見抜いて、自分に代わって国を治めさせようとした。しかし、ダニエルに嫉妬する人々は、陰謀を企て彼を訴える口実を捜した。

＊陰謀渦巻く中でも

しかし、ダニエルの仕事ぶりは、忠実で、何の怠慢も欠点も見つけられなかった。そこで、陰謀者たちは、ついに、ダニエルの信仰（神の律法に従う信仰）のことで訴える口実を見付けた。彼らは、ダレイオス王をそそのかして、30 日間王様以外に祈願する者はだれでも獅子の穴に投げ込まれる、という法律を確定させたのだ。これは、ダニエルがイスラエルの主なる神様に礼拝をささげたならば、処刑することができる法律だった。しかし、ダニエルは、いつものように、主なる神様の御前に出て感謝の祈りを捧げていた。ダニエルは、主なる神様に、自分の人生のすべてを委ねていたのだ。ダニエルが主なる神様に祈っている最中に、陰謀者たちが押し入ってダニエルを逮捕し、ダレイオス王に突き出し、王の命令に違反したので、獅子の穴に投げ込んで処刑してほしいと訴えた。

＊主に信頼して生きる幸い

ダレイオス王は、ダニエルが処刑されるような法律を作ってしまったことを非常に悲しみ、ダニエルを擁護したが、陰謀者たちは認めず、結局、ダニエルは飢えた獅子（ライオン）が住んでいる穴に投げ込まれ、入り口が塞がれることになった。しかし、主なる神様の御手が動いて、ダニエルは、獅子に食べられることなく、無傷で穴から出ることができた。ダレイオス王は、ダニエルが無事だったことに大いに驚き、国中におふれを出して、ダニエルが信頼している主なる神様を畏れるように命じた。

私たちは今、混乱した時代を生きている。国家や民族間の争いはこれからも続くだろう。異常気象、天変地異はますます深刻になるだろう。ダニエルは、少年の頃、自分の国が滅びるという絶望を経験した。彼は国家に頼ることができないことを痛いほど体験した。それ以来、彼は一貫して、主なる神様を愛して、信頼して、何でも相談して、どんな時にも感謝の祈りをささげながら生きる道を確固たるものにした。私たちも、そのような生き方を続けていくと、人知をはるかに超えた主の導きがあり、大きな危機が襲ってきても不思議と助けられ、
人々から慕われ、幸いな人生へと導かれていくのだ。